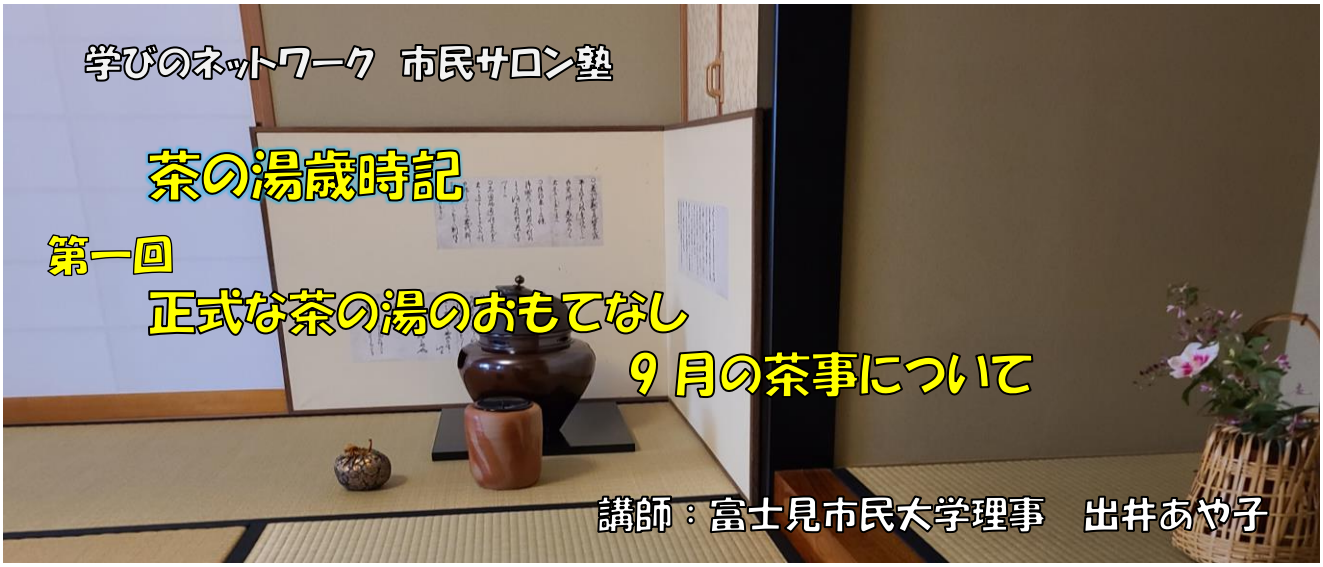

：

日　時　8 月 24 日(土)10:00~12:00
場　所　鶴瀬公民館第 3 集会室
講　師　出井あや子
　　(NPO 法人富士見市民大学理事)
参加者　　23 名

講座内容

小学校の図画工作の教員をしていた時、子どもたちに展覧会でベニヤ板やボール紙を使って国宝待庵のような茶室を作らせた。その際、子どもたちに茶道の歴史、千利休、国宝待庵についての簡単な説明をした。その内容を膨らませて話をする。

1、茶道の歴史、千利休、待庵、子どもお茶会について

はじめは寺院で飲まれた茶が、闘茶というある種のゲームのような喫茶法で広まっていった。
その後、村田珠光、武野紹鴎を経て千利休が登場する。
千利休は小さな茶室で客との交流を大切にする侘び茶を大成した。
わずか二畳の小さな空間に茶を点てる亭主の謙譲の形として低い天井、客への尊敬の形としての高い天井など、もてなしの心を形として表している。
子どもたちはその形の意味を知って、茶室を作った。
客を思って亭主はさまざまな道具を準備する。客はそのもてなしの形に対して感想や問いかけをすることによって和やかな交流が生まれる。
子どもたちもそのようにして子どもお茶会を開催した。

2、茶の湯歳時記　９月の茶事

菓子と薄茶の茶会は参加したことがあるかもしれないが、茶道を嗜む者にとって正式な茶のもてなしは茶事である。炭をおこして、湯が沸くまでの前後、茶懐石という食事のあと菓子が振る舞われる。中立という休憩をはさんで、再び席入りして濃茶、薄茶というおおむね４時間を費やすお茶のフルコースである。
亭主は客組や季節によって茶事の組み立てや道具組を工夫する。
９月の茶事では、秋の訪れを漢詩や和歌で床を飾り、表千家では如心斎という裏千家などとも関わりの深い七代家元にゆかりの道具などを選んだ。
秋草文様や武蔵野ゆかりの和歌にちなんだ文様などを紹介した。

報告　出井あや子